

ユーラシア東部における 青銅器文化

弥生青銅器の起源をめぐって

Bronze Cultures Around Eastern Eurasia at 1st Millennium BC
and the Origin of Yayoi Bronzeware

小林青樹

KOBAYASHI Seiji

はじめに

①ユーラシア東部における諸文化圏の展開

②銅剣の起源と系譜

③銅矛の起源と系譜

④青銅武器の系譜の問題と祭祀の系譜

おわりに

【論文要旨】

本論は、弥生文化における青銅器文化の起源と系譜の検討を、紀元前2千年紀以降のユーラシア東部における諸文化圏のなかで検討したものである。具体的には、この形成過程のなかで、弥生青銅器における細形銅剣と細形銅矛の起源と系譜について論じた。まず、ユーラシアにおける青銅器文化圏の展開を概観した上で、細形銅剣の起源については、北方ユーラシアでは起源前1千年紀前半の段階から、中国北方系の青銅短剣の影響を受けたカラスク文化系青銅短剣の系列があり、一方、アンドロノヴォ系青銅器文化の釜柄式銅矛系列の影響を受けた系列があった。これらは相互に関係があり、部分要素を相互に補完する関係にあった。細形銅剣の祖型である遼寧式銅剣系列の起源は、このアンドロノヴォ系青銅器文化の銅矛にあり、この影響が山西経由で遼西から遼東に及び、釜柄部の製作に必要な土製鋳型を使用する技術がなく、無柄の有茎式の銅剣を創作し、そこに伝統的な骨剣や石剣の特徴を取り入れて成立したと考えた。一方、細形銅矛の形成についても、アンドロノヴォ系青銅器文化の銅矛に求め、山西地域を経て燕山地域や遼西地域に段階的に流入し、柳葉形銅矛系列となったものに系譜を辿ると考えた。以上の検討をふまえて、武装様式の起源については、銅剣・銅矛ともに長短、大小のセットをなすが、車馬が用いられた地域は両者があり、車馬が欠落する遼東から韓半島で短剣、短矛が主流となり、弥生青銅器の武装様式の起源となったと考え、弥生青銅器祭祀における埋納習俗の起源については、北方ユーラシアの紀元前2千年紀段階の青銅器文化に認められ、中国北方地域を経て韓半島に伝播した習俗であると結論づけた。

【キーワード】 ユーラシア東部、初期青銅器文化、弥生青銅器、銅剣、銅矛、祭祀

はじめに

弥生文化は、起源前10世紀半ば頃に成立し、紀元後3世紀半ば頃に終焉を迎える。この長い期間に、弥生文化は大陸との相互交渉により文化変容を繰り返し農耕文化を形成してきた。弥生文化の地理的な位置は、ユーラシアの大陸文化側からみれば、東端部の周辺世界であり、当然のことながらユーラシアで熟成された様々な文化要素が多方面から流れ込む終着点である。これまでの研究では、考古学的な相対年代観をもとに、ユーラシア地域における諸文化との対応関係や系譜関係が論じられてきたが、歴博の新しい実年代の研究が進むことによって、ユーラシア地域の広大な文化の空間軸・時間軸に、弥生文化を正確に位置づけることが可能となった。これによって、同時代の相互関係はもちろんのこと、これまで不確かであった弥生文化の起源と系譜について新しい見解を提出できるであろう。

本論で問題とするユーラシアにおける弥生文化の起源と系譜に関する問題については、弥生文化研究が本格化する戦前頃からすでにその起源を、中国中原だけでなく、中国北方から中央ユーラシアにまで求める考えがだされていた〔高橋1916、梅原1933、水野・江上1932、江上1936など〕。その後、遼寧や内蒙古をはじめとする中国北方地域において新資料が増加し、具体的な様相が明らかになってきた。ただし、歴博による新しい年代観が発表される2003年以前にあっては、具体的に系譜を辿る関係には、まだ年代的根拠が定まらず多くの問題があった。しかし、2003年以降、弥生文化の年代観の再構築作業が進み、同時に韓半島、遼寧、内蒙古の青銅器の年代自体の再構築を促した結果、すでに同様な年代と地域研究が進展していた中央ユーラシアから東部ユーラシアにかけての広域な地域のなかに、時間的に位置づけることが可能となった。このような状況が、本論のような検討を可能としたのである。

こうした研究の過程で、特に重要な役割をもったのが、青銅武器の研究であった。日韓の青銅武器については、後述するようにそれぞれ起源から系譜にいたる過程で相互に複雑に絡み合い、関係性をもっていた。そして、これら青銅武器は日本列島では、埋納され大形化するなど祭器としての側面をもっており、当然ながら、こうした祭祀・儀礼自体の起源も大陸に求めることができるはずである。本論では、以上の2つの検討を行なうために、ユーラシア東部における諸文化圏について整理し、青銅器文化の形成過程とユーラシア大陸の東部に伝播する過程についての大枠について見ておくことにする。そして、弥生文化における青銅器文化（以下「弥生青銅器」と略す）の主要な器種のうち、銅剣・銅矛という北方ユーラシアにまで系譜を辿ることが可能な青銅器の起源と系譜について、その大枠と展開過程を検討する。そして、以上の検討をふまえて、青銅武器を中心とする祭祀的な意味の起源と系譜について新たな考えを提示したい。

なお、細形銅剣の祖型である遼寧式銅剣の起源は、弥生開始年代と深く関わり、細形銅矛と銅戈の起源は燕国の東方への拡大と弥生時代前期末から中期初頭の年代と大きく関わっている。すなわち、青銅武器の起源の問題は、弥生時代の年代問題と不可分の関係にあるので、本来であれば年代問題についても詳しく触れなければならないが、今回は紙幅の都合もあり、青銅武器の起源と系譜のみに焦点を絞ることにする。

①……………ユーラシア東部における諸文化圏の展開

(1) 紀元前 2 千年紀から紀元前 2 千年紀後半の諸文化圏(図 1・2)

ユーラシア大陸において、弥生青銅器の起源に大きく関わるのは、起源前 2 千年紀以降の中央ユーラシアから東部の諸文化圏にある。

ユーラシア大陸の中央部から東側の地域は、非常に広範囲に及ぶ(図 1～4)。特に、そのかなりの部分を占めるロシアにおいては、青銅器文化の分布圏は植生環境による基本的な区域分けがなされ、それを基本として議論される[chernykh1992 ほか]。また、チェルヌィフは、ユーラシアにおける青銅器時代に起こったグローバルな冶金化プロセスのモデル化のために、技術的、形態的に類似する器物のグルーピングに基礎を置いた冶金圏(Metallurgical province)という考え方をを用いて議論している。今回の図の作成にあたっては、このチェルヌィフによる冶金圏のうち、ユーラシア冶金圏については、その範囲を示すにとどめ、コルヤコワなどによる、主要な文化圏を並立させている[Koryakova and Eoimakhov2007 など]。ここでは、多少強引ではあるが、ロシア、新疆、中国北方といった大地域ごとの研究成果を引用して合成し、図 1 から 4 のようなユーラシア東部における諸文化圏の図を作成した。なお、各文化圏の空間的広がり表現した図 1 から 4 のうち、旧ソ連における様相については、コルヤコワの考え方[Koryakova and Eoimakhov2007 など]を元に作成した。そして、この図中で、ウズベキスタンからキルギス周辺のアラル海南東部、バルハシ湖南部と北西部にも青銅器文化の遺跡群があるが、今回はこれらの地域については、年代等について不明な点が多くはずしている。

表 1 ユーラシア東部諸文化の併行関係

諸文化	BC3000	BC2000	BC1300	BC1100	BC800	BC600	BC400～300
ロシア中東部 アルタイ	アフアナシェボ文化 先アンドロノヴォ文化	セイマ=トルビノ系 アンドロノヴォ文化 ペトロフカ文化/アラクリ文化 フェドロヴォ文化	アンドロノヴォ様文化 サルガリー文化	イルメン文化 カラスク文化	先スキタイ/スキタイ タガル文化	スキタイ文化/サカ	バジリク
新疆		青銅器時代(天山北路文化他)		早期鉄器時代(焉不拉克文化他)			
甘肅・寧夏	馬家窯文化 半山類型 馬廠類型	四霸文化 齐家文化		寺窪文化	沙井文化	(干家)	(馬庄)
内蒙古中部	老虎山文化	朱開溝	李家崖文化	先オルドス青銅器文化 狼窩子坑	オルドス青銅器文化 毛慶溝・西溝畔		
中原	廟底溝 王湾	二里頭 商前期	商後期(殷墟期)	商末・西周	西周末・春秋前半	春秋後半～戦国初期	戦国後半
燕山 燕 長城以北	雪山		抄道溝	琉璃河 小河南 白浮	燕 玉皇廟文化	燕国 燕の領域拡大	
遼西北	小河沿文化	夏家店下層		夏家店上層文化	燕化領域の東方への 拡大		燕の領域拡大
遼西南	偏保類型	高台山文化	魏營子類型	凌河文化	燕化領域の東方への 拡大		燕の領域拡大
遼東	郭家村	小珠山上層	双蛇子3期	双房	崗上	鄭家窪子	燕の領域拡大
韓半島	櫛日文中期 後期		無文土器早前期	中期	後期	清川江以北は燕の 領域拡大	
弥生文化	縄文後期	縄文晩期	弥生早期		弥生前期	弥生中期	

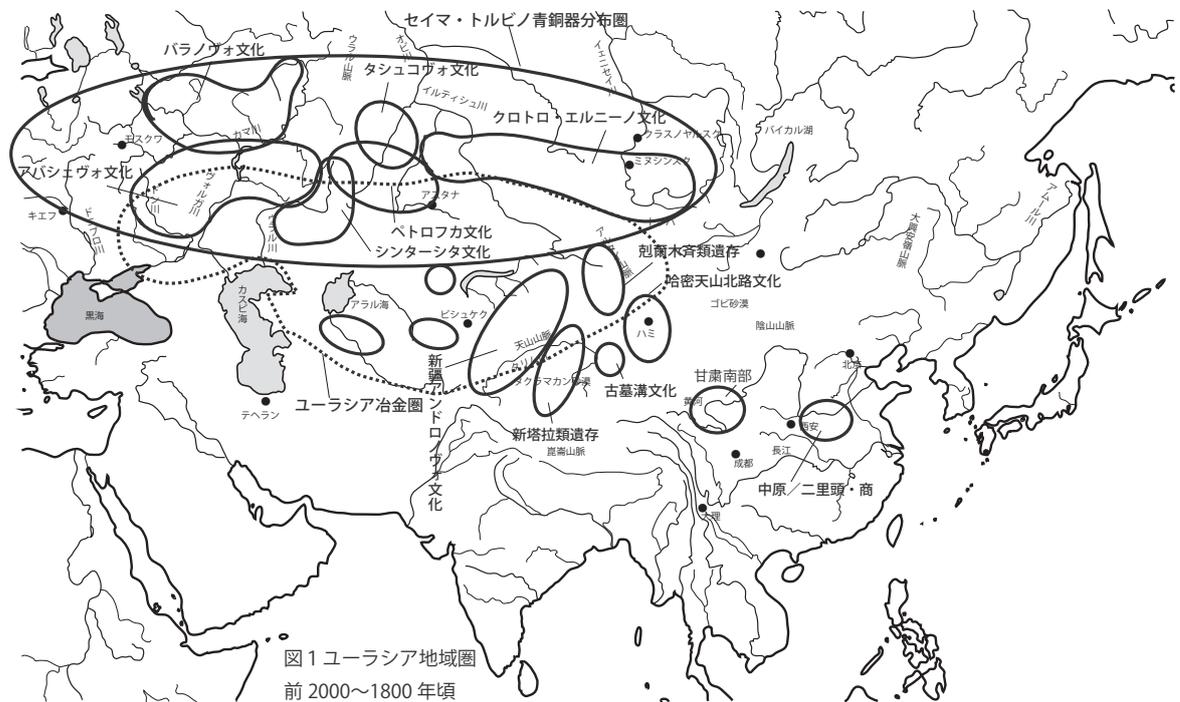


図1 ユーラシア地域圏 (前2000～1800年ごろ)

この図中、以下の本論で関係する議論を踏まえ、旧ソ連の領域については、やや細かく文化圏を表示し、一定の時期幅のなかの諸文化を重ねて表示している⁽¹⁾。その他の注意点については、各図の説明において触れることにする。なお、本論で触れるユーラシア東部における諸地域の編年網については、表1のように整理した。

まず、図1は、紀元前2000年から前1800年頃まで、図2はその次の段階である紀元前1800年から前1500年頃まで、図3はその次の段階である紀元前1500年から前1100年頃までの諸文化圏の展開を整理したものである。図4は、紀元前1000年から前800年頃までの諸文化圏を中心に中国については戦国時代頃までを重ね合わせた。

小アジアでの冶金による銅器文化の開始は、紀元前8千年紀にまで遡り、その後中東を経て、旧ソ連領では、紀元前4千年紀中頃あるいは後半において始まった[高濱2006]。こうした銅器文化の起源の年代は、本論で見て行くような紀元前2千年紀以降の内容とはかけ離れており、今回は青銅器文化圏の東方への拡大が大きく展開しはじめる紀元前2千年紀以降を対象とする。

図1でまず注目されるのは、黒海の東岸からヨーロッパ平原を西限とし、北は西シベリア、東はアルタイ地域、南はアラル海から新疆地域に広がる先アンドロノヴォ文化ホライズンと、いわゆるユーラシア北方草原森林地帯に広がるユーラシア冶金圏⁽²⁾の範囲である。先アンドロノヴォ文化ホライズンは、主に黒海とカスピ海に接続する諸河川流域に諸文化は密集しており、シンターシタ文化とペトロフカ文化はユーラシア冶金圏と接する。このユーラシア冶金圏と東側で接するのがカザフスタン東部から新疆西部の新疆アンドロノヴォ文化圏である。図2の段階(紀元前1800年から

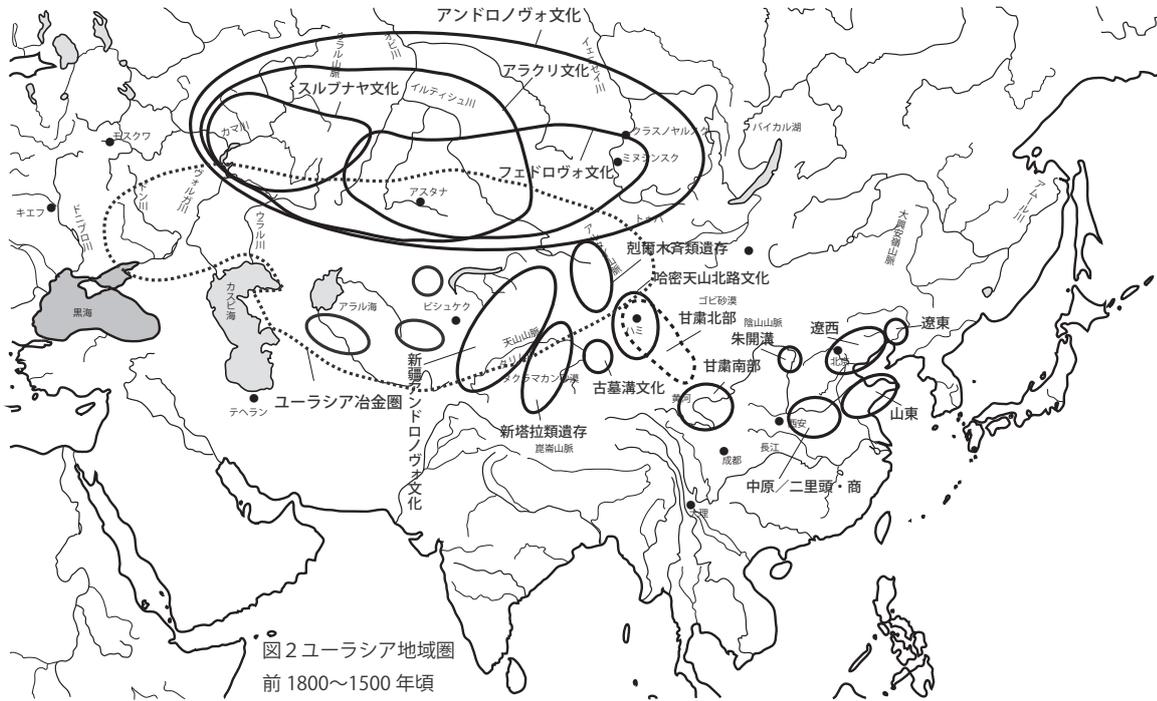


図2 ユーラシア地域圏 (前1800～1500年ごろ)

前1500年頃)では、旧ソ連における2つの広大な文化圏は、スルビナヤ文化、アラクリ文化、フェドロヴォ文化からなるアンドロノヴォ文化圏となり、新疆地域では第1段階の分布圏をそのまま維持する。以上の分布圏と重なるのが、セイマ=トルビノ青銅器文化圏である。セイマ=トルビノ青銅器文化圏は、紀元前1500年から前1400年頃に、先アンドロノヴォ文化ホライズンとアンドロノヴォ文化圏の範囲をほぼカバーする。アンドロノヴォ文化圏は、一般的な総称であり、各地域の類似した諸文化を包括してアンドロノヴォ様文化とも呼ばれる。アルタイ周辺など東方を起源とする本文化圏は、遠く東ヨーロッパにまで分布を広げる。セイマ=トルビノ青銅器文化は、有鋸矛、有鋸斧、ナイフを特徴とし、有鋸矛は、鋸が身に接続するところにフォーク状の加工がなされている(図6-1)。またナイフには、羊や馬、人などの像が付けられる。集落からは出土せず、墓地からの出土や一括埋納が多く、墓では遺体や土器、盛り土がない。青銅製武器が墓の床面や壁面に突き刺した状態で発見されることがある。非常に、特異なありかたを示す青銅器群である。このセイマ=トルビノ青銅器文化は、アルタイ周辺など東方を起源とし、遠く東ヨーロッパにまで分布を広げるが、チェルヌィフはこうした青銅器を製作した集団は、前16世紀から前15世紀頃に、冶金術をもった青銅器職人というだけでなく、武器を持った戦士集団であり、アルタイ地方から西方へ移動していったという「戦士西漸モデル」を想定した[chernykh1992]。最近、セイマ=トルビノ青銅器群のうち、有鋸矛の分析を行なった松本圭太は、詳細な型式学的分析と製作技法などの再検討の結果、発生地はウラル山脈付近の可能性があり、その分布についても一度きりの集団移動ではなく、一定期間、文化圏内部での関係性が維持されたと考えた[松本2011]。

中国では、第1段階(図1)で甘粛省を中心とする齐家文化をはじめとする初期の青銅器文化圏があり、中原では搬入青銅器や少数生産ではなく、一定量の青銅器を保有する段階である二里头文化がある。第2段階(図2)では、中国内部での青銅器の在地生産が拡散し、殷代以前の地域間関係の複雑性を示している。この段階で問題となるのは、いわゆる東アジア初期青銅器文化の二極化問題である。東アジア初期青銅器文化の二極化問題とは、青銅彝器を中心とする中原と、中央ユーラシアとの関連が強い新疆や長城地帯の青銅器の関係性を表現した考え方であり、宮本一夫は、この関係性を中原の農耕民と中央ユーラシアの東端に位置する新疆、長城地帯に居住した牧畜農耕民という、東アジアの歴史展開における基礎である二項対立的構造とし、この段階にすでにその構造があったと考えた[宮本2005]。この関係性に関して注目されるのは、セイマ=トルビノ青銅器の有蓋矛などが、青海省沈那などで出土していることである[宮本編2008]。松本圭太は、こうしたセイマ=トルビノ青銅器文化圏のあり方と同時に進行したユーラシア冶金圏の東方への伝播のあり方が、東アジア初期青銅器文化の二極化問題に関連すると見る[松本2011]。松本によれば、ユーラシア冶金圏は、新疆西部までアンドロノヴォ文化の土器を伴い、コンプレックスとして流入しており、新疆東部、甘粛、内蒙古の長城地帯では、ユーラシア冶金圏の影響を受けつつも、各々で実用工具や装飾品を志向しているとする。一方、長城地帯の南側の青海省、陝西省、山西省、河南省では、セイマ=トルビノ青銅器文化圏の影響があり、青海省沈那遺跡出土のセイマ=トルビノ青銅器系の有蓋矛のように非実用的志向が見られるとし、これらが、東アジア青銅器文化の二極化とおおまかに対応するとした。二極化の背景について、宮本一夫は中国各領域における独自の志向性によるという指摘をしているが[宮本・白編2009]、松本は中央ユーラシアの青銅器文化本来のこのような二極の系譜性や内容が関わっていた可能性を指摘したわけである[松本2011]。

しかし、松本の想定したセイマ=トルビノ青銅器文化圏の影響は、特徴的な青銅器が伝播するというレベルでの影響であり、この現象は宮本が想定したような中央ユーラシアの系の牧畜農耕民と中原の農耕民の対立のような社会構造の二項対立現象と同一のものであると考えるにはまだ材料が不足している。むしろ、後述するようにセイマ=トルビノ青銅器文化系の銅矛は、内蒙古や遼寧の青銅器文化にも影響を与えており、極めて複雑な関係性が横たわっているようである。

(2) 紀元前2千年紀後半から紀元前1千年紀前半の諸文化圏(図3・4)

紀元前2千年紀後半になると、アンドロノヴォ文化圏については、西はカスピ海に接続する河川流域からオビ川流域のおよそ6つの諸文化圏の並列状態となり、アルタイ地域では刀子と短剣の発達したカラスク文化が成立する。その時期は、中国におけるカラスク系の青銅器の存在から殷の末期頃であり[高濱1983、松本2011]、その系譜は西周中期頃まで追跡できる。カラスク文化後半期については、後出するタガール文化との関係が問題となり、タガール文化自体、前10世紀まで遡るという見解もあるようで[田中2011]、両文化の関係が焦点となっている。また、先スキタイ文化の代表的存在であるアルタイのアルジャン古墳I出土では、カラスク/タガール系の銅剣が前9世紀後半頃まで遡ることが判明しており、図4に示した先スキタイ文化の広がりには、すでにこの段階に形成されていたことが判明している。また、カラスク文化の段階以降に、バイカル周辺からアルタイ、そしてモンゴル平原部を中心に鹿石が広がる(図4)。鹿石は、さらに中央ユーラシア、に

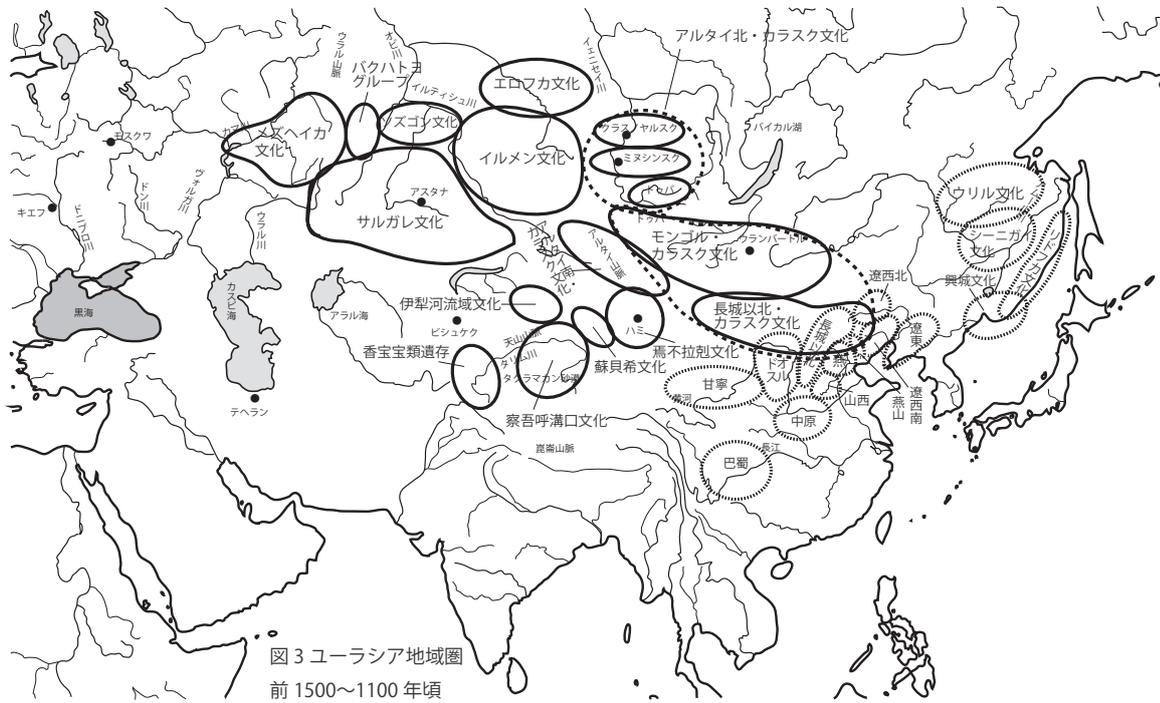


図3 ユーラシア地域圏(前1500~1000年ごろ)

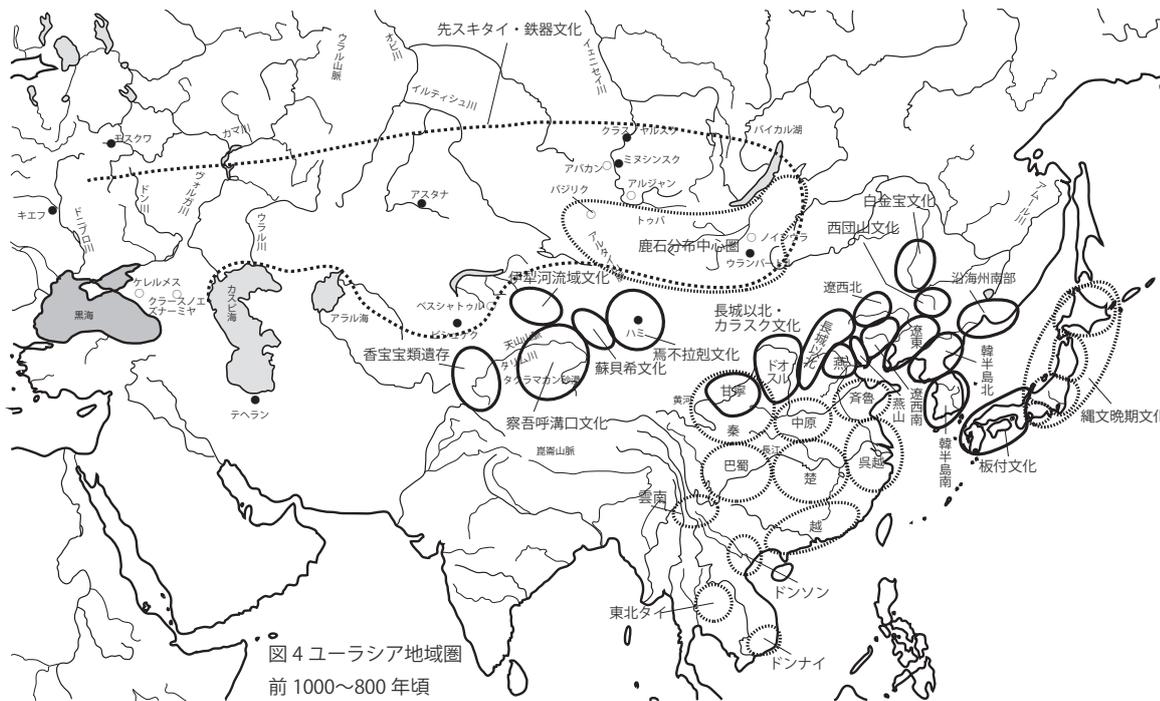


図4 ユーラシア地域圏(前1000~800年ごろ)

まで拡散するが、分布の密度から見て当地域が中心であるのは間違いない。この鹿石については、高濱秀が指摘するように石柱表面にカラスク系の短剣などが線刻されており〔高濱1995〕、出現時期はカラスク文化成立期にまでは遅くとも遡るであろう。

以上のような北方ユーラシア地域の様相に対して、中国の状況は紀元前1500年から紀元前1100年頃では、中国北方地域において、直径800kmから1000kmほどの文化圏が並立する状況となる(図3)。この地域圏をベースに、西周併行期から春秋期にかけての段階(図4)では、さらにこの南北の周囲にほぼ同規模の範囲をもつ文化圏が形成される。韓半島や日本列島、沿海州などはユーラシア東部でも青銅器時代末期になりようやく青銅器時代を迎えたわけである。ただし、韓半島については、最近、炭素年代で前1000年を越える青銅短剣が京畿広州市の馭洞遺跡で出土し、これまでもより青銅器時代の開始年代が早まる可能性が高まった⁽³⁾。

②……………銅劍の起源と系譜

(1) 銅劍の出現と系譜(図5)

ここでは、弥生青銅器の一つである細形銅劍の起源と系譜を明らかにする。まずは、ユーラシア東部におけるいくつかの銅劍を大別して、大きな流れを考慮しながら、各類の関係性を考え、起源と系譜関係の検討をすることにした。なお、大別はA類～E類とし、それぞれを大系列とし、大系列内での小系列を区別する場合は、1から数字を付けて区別する。本来であれば、小系列内の諸型式の順番も示さなければならないが、図が煩雑となるので、今回は明示しない。

ユーラシア東部における銅劍の起源は、旧ソ連地域では、紀元前3千年紀においてすでに無柄で有茎式の銅劍が存在している。紀元前2千年紀以降のアンドロヴォ文化段階では、この無柄有茎式銅劍に加え、有柄銅劍系列が出現しており、紀元前2千年紀後半段階のアラクリ文化段階には、有柄銅劍系列が見られる(2)。類似するものは、チェルヌィフによれば、ヴォルガ川流域周辺からモルダヴィアにかけても見られるようであるが〔chernykh1992〕、柄の中軸に長方形の凹みをもつ。その後、前2千年紀末頃のメゾフカ文化などでは、カザフスタンからアルタイにいたる地域において、柄の中軸に透かし風の窓をもつ有柄銅劍系列が見られる(3)。青銅短剣の出現と形成過程については、以下に登場する中国北方地域の青銅短剣とこうした旧ソ連地域のかなり古い青銅短剣との関係が問題となる。

特に、それは紀元前1千年紀以降に青銅短剣と青銅刀子を多数組成するカラスク文化が問題で、中露蒙のいずれに起源するかが問題となっている〔高濱2005ほか〕。カラスク文化の銅劍には、大きく曲刃柄銅劍系列のA類(5・7)と典型的なカラスク系の有柄銅劍B類系列がある。まず、後者のB類からみていこう。

このB類の劍の起源に関わる第1の候補は、内蒙古中部の朱開溝遺跡出土の青銅短剣(18)であり、紀元前1500年頃、中国北方地域では最古の銅劍である〔田・郭2004〕。この銅劍は、鹿などの長管骨を半裁し石刃を嵌め込んだ骨劍を模したものであるという考え方が宮本一夫や甲元眞之により指摘されている〔宮本2008, 甲元2008〕。この銅劍をめぐるのは、後のカラスク系有柄銅劍や中国

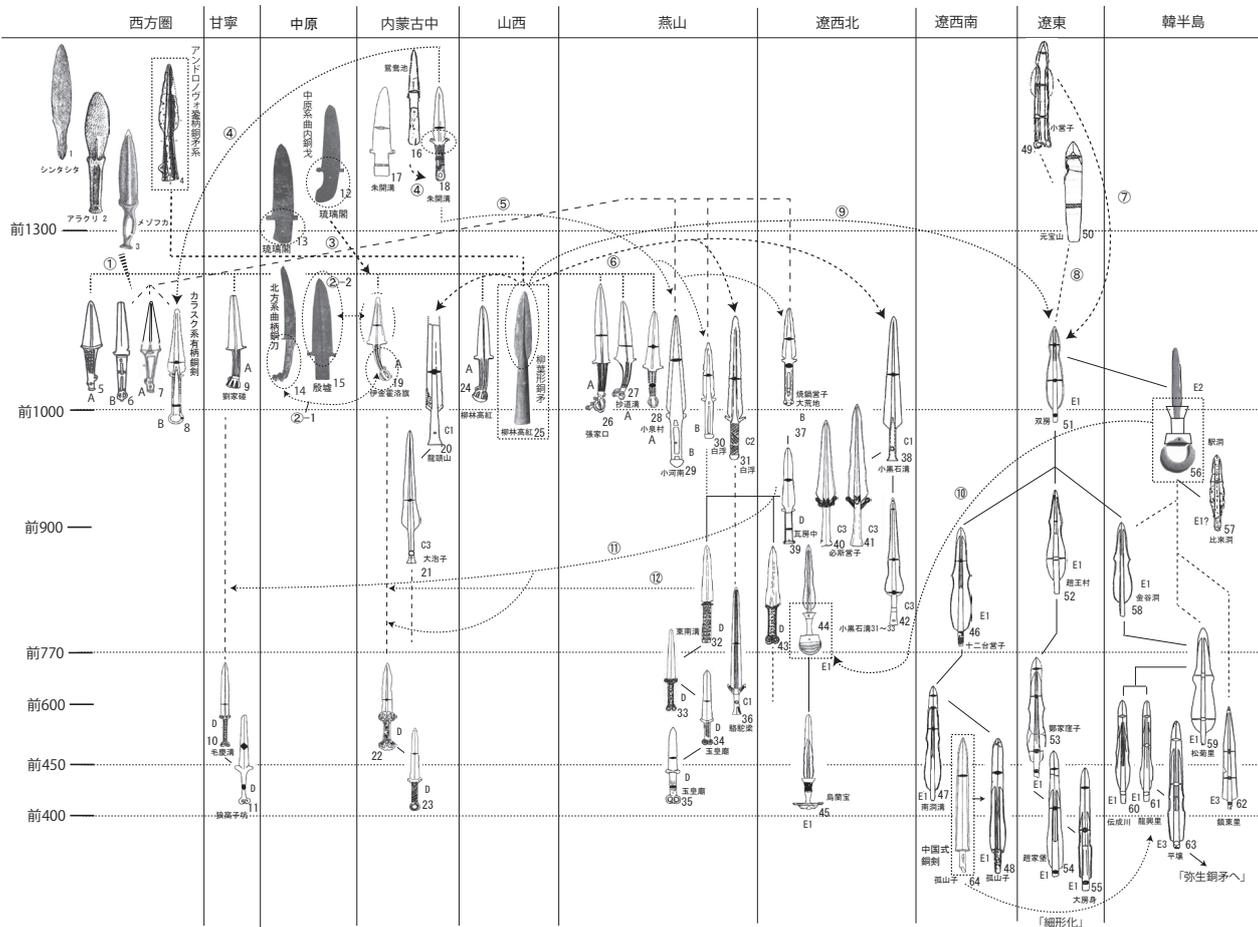


図5 銅剣の起源と系譜

北方各地域で出土する同種の有柄銅剣の起源であるとする説があり [田・郭2004], 一方、それらの銅剣とは年代的な隔たりがあるということ、系譜関係を認めない、もしくは保留する考え方があり [甲元2008 など]。また、第2の候補として、甲元眞之は、遼寧地域の焼鍋窩子大荒地遺跡出土の有柄銅剣 (37) を挙げ [甲元2008], 朱開溝短剣と同じような骨剣が起源であると考えている。朱開溝の短剣の年代は当地域のカラスク系青銅短剣B類系列の年代から乖離しているが、筆者は、まだ両者の系譜的連続性の可能性は残っていると考える。なぜならば、朱開溝短剣の逆ハの字に開く格 (鏑) の形態は、その後のB類有柄銅剣の基本形態であり、春秋期以降のオルドス系のB類有柄銅剣系列の祖型である夏家店上層文化の短剣 (図5-32・39 など) にまで系譜が辿れるからである。大荒地例 (37) や小河南例 (29), 白浮例 (30) のように、剣身から分離した形で逆ハの字に突出するものの祖型の候補は、A類の曲柄銅剣系列ではないのは明らかで、いまのところ朱開溝短剣にしか求められず、間を繋ぐ未発見型式の存在が予想される。

さて、それでは冒頭のアンドロヴォ文化系の有柄銅剣はこうしたB類有柄銅剣系列の祖型にはなりえないのであろうか。剣の全体の形状と、弧状を呈する剣身の形態は、カラスク系有柄銅剣B類系列的ではない。両者に関係性があるとすれば、それは、柄の部分の凹みや方形の孔である。こ

の部分の祖型が、果たして朱開溝短剣のような長管骨を半裁した骨剣の形状（断面C字形）に起源するのか、それともアンドロノヴォ文化系の有柄銅剣の系譜にあるかは、先にみたように朱開溝短剣以後の短剣の発見によってしか判断できないが、アルタイ周辺地域のカラスク文化では、前段階の銅剣要素を引き継いでいる可能性は高いと考えておきたい。

一方、A類曲柄銅剣系列は、その分布の中心は明らかに長城地帯にあり（19など）、年代的にもカラスク文化地域のものよりも古い。最近、松本圭太はこうした長城地帯の曲柄剣のタイプをカラスク文化のA類曲柄銅剣の祖型と考えたが〔松本2011〕、甲元眞之も、この種のタイプをカラスク系青銅短剣の祖型とし中国北方起源説を考え、曲柄刀子（14など）をこのA類曲柄銅剣系列の祖型と考えている〔甲元2008〕。確かに、曲柄の特徴や形態は同じものと見てよい。ただし、剣身に関しては刀子が変容したと見ることもできるが、脊が通る三角形の短い剣身の候補として、殷系の銅戈（15）を加えたい。内蒙古中部の朱開溝遺跡では、殷系の銅戈（17）も出土しており、町田章は、この銅戈の副葬状態から剣の代用として佩用したと考えた〔町田2006〕。こうした銅戈使用法が内蒙古中部で伝統的にあるとすれば、中原系の銅戈と刀子の柄が接合しA類曲柄銅剣系列が誕生した可能性を考えるべきであろう。

その後、A類曲柄銅剣系列の系譜はなくなるが、中国北方地域ではB類有柄銅剣系列が主体となり、長城地帯から遼西北では西周前半にD類の瓦房中例（図5-39）段階から格や柄の有文化が顕著となる。これは春秋期以降のオルドス系のD類有柄銅剣系列の祖型であり、夏家店上層文化の短剣（図5-32など）を経て中国北方各地域に広がっている。ただし、長城地帯から内蒙古中部と甘寧地域では西周中期頃から春秋前期頃までのこの系譜の様相が不明で、この時期あたりに一度、各地域の伝統が断絶し、新たな集団による地域圏の形成があった可能性がある。これは、甲元が起源前1千年紀前半の寒冷化現象とした時期と関連している⁽⁴⁾。

(2) 鍔柄式銅剣の起源と系譜

殷末期から西周初期にかけて、内蒙古中部、長城地帯から遼西北にかけてC類の「曲刃鍔式青銅短剣」〔靳楓毅1982〕などと呼ばれる銅剣が出現する。名称については、町田章の指摘のように直刃も存在することから〔町田2006〕、鍔柄式銅剣系列と呼ぶことにする。ここでは、直刃タイプを柄がラッパのように下端が開くC1類（図5-20・38）とし、直刃タイプでB類の有柄銅剣の柄の断面C字形の部分を筒状にし、下端に傘状のキャップをはめるものをC2類（図5-31など）、そして、曲刃タイプをC3類（図5-41など）とする。

これらの系列の変化は、図5に示した通り殷末頃から西周初期のC1類から西周中期頃にC3類に変化し、直刃から曲刃へ変化する。C2類については白浮例（31）の剣身の形態からみてB類有柄銅剣系列の変化形態であるが、朱永剛のようにこの種のものをすべてオルドス系の短剣にはできない〔朱永1992〕。そこで問題となるのが、C1類の祖型であろう。この種の鍔柄式銅剣系列は中原系にはなく、内蒙古中部、長城地帯から遼西北にかけて出現したとみてよい。そこで注目されるのは、小黒石溝遺跡85AIM2出土の鍔柄式の大形銅矛である。この銅矛は、相伴した遺物によって殷後期から末期頃に位置づけることができ〔小林2010〕、本系列は、遼西地域に特徴的で、遼西柳葉形銅矛系列と呼ぶ〔小林2011〕。この系列の銅矛は、殷後期から殷末頃の山西省柳林高紅

例(図5-25)[楊紹舜1981]と類似し、内蒙古中部から遼西あたりにまで分布する。さらにこの系譜は、旧ソ連地域のアンドロノヴォ青銅器文化の銅矛(4)に系譜を辿れる[小林2010]。小黒石溝遺跡85AIM2においては、鍔柄式銅劍も同時に出土しており(38)、鍔柄式の大形銅矛から鍔柄式銅劍が出現する可能性は高い。これまでも鍔柄式の矛と劍の両者間に強い関係があることが考えられており[宮本2000など]、むしろ内蒙古自治区出土の鍔柄式銅矛は銅劍であるという考えもある[李2002]。しかし、劍身の脊柱部分に見られる研ぎ分けによる鑄が、鍔柄部末端にまで通っている特徴が、鍔柄式の矛と劍の両者に共通しているのも矛と劍の親和性を物語っている。なお、鍔柄式銅劍の起源を、カラスク文化の中空の銅柄に求める考え方もあるが[朱永剛1992、宮本2000など]、後述する山西省柳林県高紅村出土の柳葉形銅矛系列の銅矛(9)が殷代後期から末期頃に遡るので、筆者はこの系譜が当地域に出現した山西系の鍔柄式銅矛の系譜にあると考える。

ただし、この小黒石溝遺跡85AIM2例のような直刃の鍔柄式銅劍系列(38)は、山西で見られるような柳葉形の劍身ではなく、在地のB類の有柄銅劍系に見られるVの字形の関の形状をなすので、在地の要素と接合していることがわかる。また、鍔柄式銅劍系列の多くは、夏家店上層文化にも引き続き存在し、長城地帯では春秋期前半にまで残る(36)。なお、西周中期から後期にかけてのヌルホ山脈以北の夏家店上層文化の地域では、石川岳彦が指摘するように、遼西南部の大小凌河流域を中心とする地域側にC3類の曲刃タイプの鍔柄式銅劍系列が集中する[石川2009a]。

(3) 遼寧式銅劍の起源と系譜

ここでE類とする遼寧式銅劍系列の起源地については、現在、遼西・遼東両説に大きく分かれる。ただし、遼西といっても、図4で示したように、ヌルホ山脈を境に夏家店上層文化と大・小凌河文化の南北に分ける必要がある。遼西・遼東両説の考え方の特徴は、遼東説側は炭素年代や土器編年の検討を重視し、遼西説側は中原系青銅器の年代の方を信用することである。一方、起源論に関する考古学的な分析で重要視されているのは、劍身よりも劍と柄の組合せのあり方が重視されている。村上恭通は、最古段階の劍身と把頭飾の組み合わせから劍身・劍把・把頭飾の組み合わせへの変化を想定し、最古段階の組合せのある、ヌルホ山以南の大凌河上流域を起源地とした[村上1997]。宮本一夫は、小黒石溝遺跡M8501例の劍身の軸と劍柄の鏝部分との接合部分の傾きは、劍で握り刺突力を高める機能性を追及した状態と考え、この状態が成立するには、村上が指摘した劍身・劍把・把頭飾の3点セットがすべて揃っている必要があり、それが最初から見られる大凌河流域や寧城地区が、遼寧式銅劍系列の故地であるとした。さらに銅柄などから、遼西に比べて遼東では当初は実践機能がなく、時間的に遅れた段階に始まったとし、遼東の遼寧式銅劍系列は非実用の宝器であるとみる。[宮本2000]なお、最近、宮本は、小黒石溝遺跡M8501例より遡る最初期の遼寧式銅劍0式を設定している[宮本2008c]。ここで、宮本が起源地について、遼西の南北で限定していないのは、劍身・劍把・把頭飾の3点セットが一鑄の柄か組立て式の柄の違いはあっても、一応、すべて揃っているからである。こうした柄のあり方に前後関係を見出すのが、近藤喬一の考え方である[近藤2000など]。

近藤は、はじめに有機質の劍柄があり、後に青銅製に置き換わったとは考えない。ヌルホ山以北の夏家店上層文化の南山根類型の範囲内で、遼寧式銅劍が誕生したときは、T字形劍柄が青銅製

としてまず出現し、劍身と一鑄する形であったと考える。その後、T字形劍柄と劍身を別々に鑄造し、組み合わせる形となり、枕石を載せる方法に変化したと考えた。この近藤説は、遼西起源説の重要な拠り所となり、朝鮮半島の2段柄式磨製石劍の起源の候補として、小黒石溝遺跡 M8501 例(図5-44)が採用されることにもなった。

以上の遼寧式銅劍遼西起源説論者の多くは、釜柄式銅劍を遼寧式銅劍の祖型とみる。近藤喬一は、組み立て式よりも古いと想定する一鑄式の柄をもつ遼寧式銅劍の起源は、夏家店上層文化特有のC3類の曲刃釜柄式銅劍とオルドス系直刃匕首式劍(B類の有柄銅劍)から生まれたとみる[近藤2000]。また、町田章は遼西でもヌルルホ山の西方でラオハ河沿岸の寧城・建平地方におけるC3類の曲刃釜柄式銅劍の分布域において、遼寧式銅劍が出現した可能性を強めるとし、近藤説同様に、曲刃釜柄式銅劍を遼寧式銅劍の祖型とみる[町田2006]。また、宮本一夫は、小黒石溝遺跡 M8501 例(44)などの遼寧式銅劍の祖型の候補として、ゆるい曲刃で獣首劍の河北省隆化下甸子の例[鄭1984]を挙げる[宮本2000など]。中村大介も同様な見解をもつ[中村2007]。ただし、この劍の年代については、格から柄部への装飾は、春秋期前半のいわゆるB類のオルドス系青銅短劍のモチーフ(図5-33など)に類似するので、春秋期の可能性が高く問題である[鄭1984・町田2006]。

一方、遼東起源論者は、刺状突起の位置が上部から下部へ下降する型式学的傾向を重視しつつ、土器編年と炭素年代から議論を組み立てる[金用珩・黄基徳1968, 林濤1980・1997, 千葉1997など]。こうしたなか、弥生年代論争が公表されて以降、春成秀爾は、遼寧式銅劍の起源は石刃を埋め込んだ小営子例(49)のような骨製短劍(石刃骨劍)にあり、この石刃骨劍の石刃は劍の先端部分に埋め込んだ状態から、棘状突起が劍身のより先端にあるものが古く、新しくなるとこの位置が相対的に下がっていくという型式学的変化の方向性を示した[春成2006]。この観点によれば、遼東の双房M6の短劍(51)が最古の遼寧式銅劍となり、遼寧式銅劍は遼東のほうが古いという結論となった。春成の検討は、小黒石溝遺跡 M8501 例に縛られることなく、まずは遼寧式銅劍自体の型式学的変遷をうまく説明したことである。

こうしたなか、筆者はまず近藤説や宮本説の根拠となった小黒石溝遺跡 M8501 例(44)の詳細な観察により、柄部と身部は身の鑄造後に接合し溶接したものであることを明らかにした[小林2008b]。本来、本例の柄部のように中空のものを石製鑄型で一鑄するのは無理で、当初から近藤説には無理があったのである。しかも、小黒石溝遺跡 M8501 例(44)は、柄には劍身と柄上部、さらに柄の下部同士を固定する目釘孔の痕跡をトルコ石の象嵌で模倣するなど、明らかにすでに存在した木製の組み立て式劍柄を銅で模したものは明らかである。さらに、遼東と韓半島では、木製の組み立て式の柄の下部に差し込んで使用する青銅製加重器が存在しており(図5-56)、特に炭素年代で前10世紀を遡ることが判明した韓国の京畿廣州市駅洞遺跡例⁽⁵⁾の青銅製加重器を装着した状態から復元する劍柄こそが、小黒石溝遺跡 M8501 例(44)の劍柄のモデルであろう。2段柄式磨製石劍の起源の候補も、遼東から韓半島のこうした組み立て式劍柄がモデルであり、年代も前10世紀を遡るであろう。このように考えれば、遼西北の曲刃釜柄式銅劍は遼東の遼寧式銅劍出現以降のものとなり、遼寧式銅劍の起源には関わらない。むしろ、逆に影響を与えた可能性がでたことになる。また、ヌルルホ山以北の遼西北では、刺状突起は鋭く尖らず、丸みをもち、また脊柱をもたない、また刺状突起さえもたない遼寧式銅劍的銅劍が見られ、当地域が遼寧式銅劍の本拠地ではない

ことがわかる。なお、遼東の遼寧式銅劍は、宝器であるという説があるが、ヌルホ山以北の遼西北のものに比べれば、はるかに刺状突起が尖り、実用的で単に鑄上がりが悪いただけであろう〔小林2008〕。

また、遼寧式銅劍系列の出現過程については、遼東説の場合、春成秀爾による骨劍起源説〔春成2006〕とは別の説も存在する。郭大順は、遼東地域において遼寧式銅劍系列の最古段階である双房遺跡 M6 墓 (51) の前段階に相当する双砬子文化段階に認められる石劍を、その起源の候補に挙げている〔郭2007〕。春成が引用する小営子遺跡の骨劍例は〔春成2006〕、遼東から相当に離れており、また時間的に隔たりがあるので、遼寧式銅劍出現直前段階に見られる石劍も十分に候補となるであろう。特に注目するのはこの種の石劍では、劍身の先端部分に研ぎ分けをもち (50)、双房 M6 例 (51) のように、刺状突起と脊柱部の研ぎ分けの部位が劍身の先のほうに位置するので、この特徴に限っては類似するといつてよいであろう。そして、遼東においては、法庫県の湾柳街遺跡において殷後期の青銅器の鑄型が出土し、青銅器の在地生産をすでに行なっていることが判明している〔曹1988〕。したがって、遼東においては、殷後期段階以降、銅劍を製作する条件が整っており、在地の骨劍、もしくは石劍を青銅器化した可能性が考えられる。しかし、遼寧式銅劍系列では曲刃の特徴を除けば、太めの断面円形の脊柱をもち、骨劍や石劍をそのまま青銅器化したとも思われない。内蒙古の朱開溝の銅劍 (18) のように、骨劍の特徴を痕跡的に模倣するような特徴も認められない。したがって、すでにある銅劍を基本に、曲刃化した銅劍が登場したと考えなければならないであろう。そうすると、殷後期段階に双房 M6 例 (51) のような銅劍を創出する条件が揃ったものを探すと、アンドロヴォ文化系の銅劍ないし柳葉形銅矛系列しかない。ただし、銅劍で類似したものはないので、もし関係があるとすれば、柳葉形銅矛系列の影響が遼東に及び、遼西で C 1 類の盞柄式銅劍系列を生み出したのとはほぼ同時期頃、遼東では盞柄部の製作に必要な土製鑄型を使用する技術がなく、無柄の有茎式の銅劍を創作し、そこに伝統的な骨劍や石劍の特徴を取り入れ曲刃化した銅劍を創出した可能性を考えたい。このとき、予想以上に銅劍の出現地域は、遼東から韓半島北部に広がっており、先にふれた韓国の京畿廣州市駅洞遺跡例のように曲刃化しなかった銅劍も遼東で出現後まもなく出現した。これは、韓半島の曲刃化しない磨製石劍をモデルに、創出した結果であろう。

以上から、筆者は、現状で遼寧式銅劍系列の起源地は遼東、さらには韓半島北部も含まれる可能性があり、遼西北には西周中期頃以降拡散したと考える。こうした遼寧式銅劍系列は、韓半島に伝播して細形銅劍系列へと派生した⁽⁶⁾。

③……………銅矛の起源と系譜

弥生青銅器における銅矛の起源を検討するにあたり、ここでは中央ユーラシアから韓半島までの銅矛を大きく A 類から K 類に分類する⁽⁷⁾ (図6)。なお、ここでの検討は、ユーラシア東部において細形銅矛の起源と系譜に関わる資料にとどめる。

韓半島の I 類の定型的な細形銅矛 (48・49) の起源は、E 2 類の朝鮮琵琶形銅矛系列 (韓半島の遼寧式銅矛) にあり、その祖型はさらに遼西に見られる D 1 類の柳葉形銅矛系列 (9・19 など) に辿ることができる〔小林2011〕。この遼西の柳葉形銅矛系列で年代的に最古の銅矛は、小黑石溝遺跡

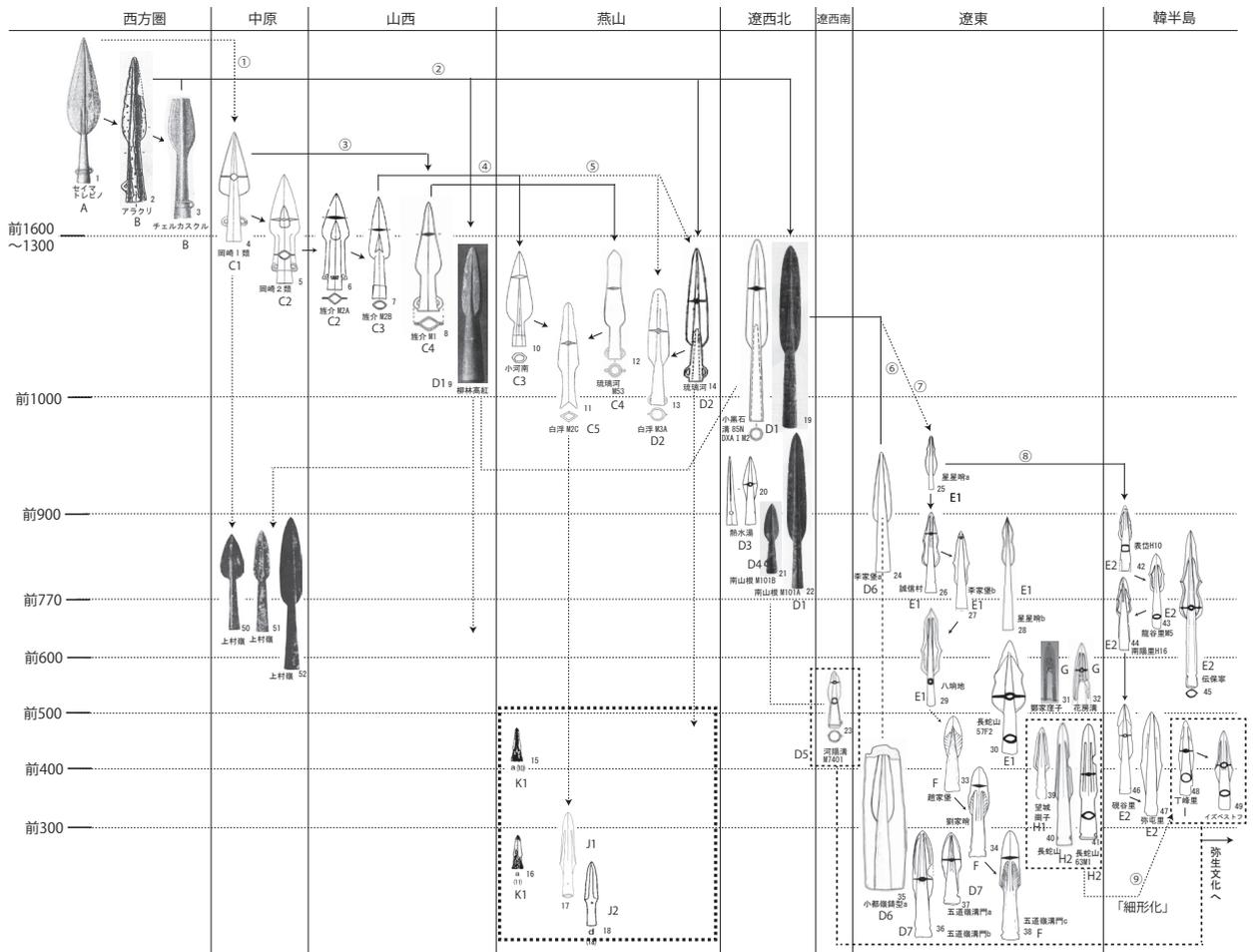


図6 銅矛の起源と系譜

85 A I M 2号墓出土の銅矛である(19)。本例を代表とする柳葉形銅矛系列に類する柳葉形の釜柄式銅矛は、林巳奈夫や近藤喬一の研究によれば、上村嶺魏国墓地1820墓出土例〔河南省文物考古研他1999〕のように、中原では春秋期以降に登場するものと考えられており〔近藤1969, 林1972〕, 林巳奈夫はその祖型として西周前期の終わりから中期にかかる狭長な矛としていた〔林1972〕。しかし中原の銅矛の系列において、西周期に遡る狭長な矛はほとんど見つかっておらず、遼西など北方系の柳葉形銅矛系列(19)がその候補となる。

そこで注目されるのは、山西省柳林県高紅村例で、小黒石溝例(19)と非常に類似した柳葉形銅矛系列の銅矛(9)が出土していることであろう〔楊紹舜1981〕。この銅剣に伴出した青銅器群は、釜式戈などから殷後期に位置づけることができ、小黒石溝例よりも古い。その他、銅盃などの共通した特殊な遺物が双方で見られるなど、柳林高紅例と小黒石溝例の間には強い類似性がある。こうした遼西と山西の柳葉形銅矛系列の起源と系譜をさらに追跡するためには、殷後期から西周前半にかけての殷系と燕山や長城地帯の銅矛、さらにはアンドロノヴォ文化系の銅矛をも含めて検討する必要がある。図6の左上側にその系譜関係を整理した。

旧ソ連地帯の青銅器文化における銅矛については、コルヤコワなどの最近の整理に基づいて、

簡単に触れておく [Koryakova and Eoimakhov2007]。中期青銅器文化以降で見えていくと、まず前2千年前後頃の、ウラルのアファシェヴォ文化・バラノヴォ文化・シンターシタ文化などでみられる銅矛は、銚柄部は鑄造後に丸めて銚柄化するタイプである。おおよそ前19世紀から前18世紀頃に出現するセイマ・トルピノタイプになると、新たな中子を利用した鑄造技術によって耳部と節帯をもつ銚柄部の作出へと移行する。ほぼ同時期のアンドロノヴォ文化段階のアラクリ文化、そして、後続する西シベリアのアンドロノヴォ様文化ホライズンのチェルカスカル文化で同じような耳部・節帯・銚柄部が見られるようになる。近年の新疆・青海・陝西などでは、セイマ＝トルピノタイプの銅矛が発見されており、西域でのウラル・西シベリア系青銅器文化の影響の強さは明らかである [宮本 2008a]。

かつて岡崎敬は、殷系銅矛のC1類(4)について、マックス・ラーの中国青銅器外来起源説 [Loehr1951] を引用して、再度外来起源説の可能性を示唆した [岡崎 2009]。A類とするセイマ＝トルピノタイプの銅矛(1)を見ると、刃部の下部が膨らむ身の形態や、片耳・両耳・節帯の存在、さらに殷系の心葉形の窪みに繋がるような脊柱下部のフォーク状の凸線部など、殷系銅矛の祖型として相応しい。また、B類とするアンドロノヴォ文化圏のアラクリ文化(2)やチェルカスカル文化の銅矛(3)は、細身の柳葉形をなし、銚柄部が伸長しており、山西から遼西にいたるD類の柳葉形銅矛系列の祖型の可能性が高い。

このような、遼西北方系銅矛系列で問題となるのは、遼西に最も近い燕から燕山・長城地帯の銅矛との関係であろう。当地域の初期銅矛において、柳葉形銅矛系列に類する琉璃河例や白浮例のような銅矛が存在する(12・13・14)。これらの銅矛にも、山西地域同様にアンドロノヴォ文化系の柳葉形銅矛系列の影響を受けていることが予想される。しかし、この系列だけではなく、さらに古相の中原系である殷系の岡崎1類と2類の系列も無関係ではない。ここで問題となる殷系の岡崎1類の系列の候補は、まず山西地域のC類とする旌介例M1例(8)であり、経路③の方向性を想定できる、耳部や脊柱の有無という特徴へと変化しおり、燕山の琉璃河例(12)へと変遷する。ただし、この系列の変遷については、耳や鎬(もしくは鎬状の細凸線)といった部分要素のあり方からみれば、岡崎1類(4)から変化した可能性のある岡崎2類(5)の系列のなかで考えることも可能である。

岡崎2類の系列は、ひれ [近藤 1969] もしくは胡 [林 1972] とされる部分と耳の喪失、さらに身の下部の心葉部の窪みの細形化に注目すれば、5→6→7→10という変化を想定でき、鎬(もしくは鎬状の細凸線)の存在から白浮M2(11)への影響関係も想定できる。なお、林巳奈夫によれば、殷後期段階でも大司空第2・3期頃に、胡(ひれ)の喪失による木の葉形の矛が生まれており [林 1972]、中原各地域では連動した変化があったようである。

また、柳葉形銅矛系列に類する琉璃河例や白浮例のような銅矛(12・13・14)には、耳部が銚柄下部にみられるが、この耳部だけが残る系列は、さらに鎬(もしくは鎬状の細凸線)も喪失するようであり、8→12へという⑤の経路を辿るという変化を想定でき、この系列の耳が白浮の13と14に影響を与えたと考えられる。ただし、琉璃河例(14)の身の形態は、殷系のハート形が逆さとなったような形からは逸脱し、むしろ柳葉形銅矛系列の影響を考える必要がある。すなわち、燕山・長城地帯の柳葉形銅矛系列は、山西や遼西と同じ系譜のものであるが、耳部の特徴などから中原系の影響も受けていることになる。しかし、殷系の岡崎1類と2類の銅矛は、いずれも祖型は

セイマ=トルビノタイプとアンドロノヴォ文化系の銅矛であり、中原から中国北方地域の初期銅矛は同じ起源から派生した類縁関係にあるものであった。なお、遼西地域では、西周前期段階には有耳のものはないので、そうすると逆に南山根B例(21)のような耳部の祖型は、白浮の銅矛を介して受容した可能性もあろう。以上のように、遼西の柳葉形銅矛系列は、セイマ=トルビノタイプとアンドロノヴォ文化系の銅矛が、山西を経て遼西に段階的に流入し、さらにその後、殷から西周の各段階にも段階的に流入し、それをもとに在地で創成されたのであろう。そして、この系列の銅矛は、上村嶺虢国墓地 1820 墓出土例〔河南省文物考古研他 1999〕のように、林がかつて指摘した春秋初期以降、中原の狭長な銅矛〔林 1972〕の起源であったのである。

その後の銅矛の系譜についても述べておこう。D1類の遼西柳葉形銅矛系列(9・19など)の系譜は、西周前半頃に遼東地域のD6類の遼東柳葉形銅矛系列(24など)へと展開し、遼寧式銅剣文化圏内において曲刃化と刺状突起、そしてこの部分での研ぎ分けの流儀の影響を受けて、西周中期頃にE2類の遼寧琵琶形銅矛系列(25など)へと変化する。本系列は、銚柄部の縮小化と、刺状突起的な刃部の形態から直刃へという変化を達成しつつ、前5世紀頃、ブレ朝鮮細形銅矛系列(48・49)へと変容し、定型的な細形銅矛へと変化した。また、この細形銅矛の出現にあたっては、単純に琵琶形銅矛系列が細形化したのではなく、琵琶形系列の系譜の影響に加えて、より「細形化」の進行した遼寧細形銅矛系列(39～41)の系譜と接合している可能性があり、背景には、定型的銅矛出現前段階の社会的変動が、燕の領域拡大の進行という社会的緊張状態を増幅させ、それにより継起したものであった可能性がある〔小林 2011〕。

④……………青銅武器の系譜の問題と祭祀の系譜

(1) 剣の長短と武装様式の起源

以上、ユーラシア東部地域において、弥生青銅器の銅剣・銅矛の起源と系譜を追跡してきた。今回、弥生青銅器のうち、あえて銅剣と銅矛に焦点を絞ったのは、両者がともに北方ユーラシア地域の系譜を引いているからである。そして、今回の検討によって、中央ユーラシアから北方ユーラシアにかけての地域の系譜にあることが明らかとなった。ここでは、まず銅剣と銅矛の起源と系譜に関する補足を行い、さらに、銅剣・銅矛の祭祀について検討しておきたい。

まず見ておきたいのは、銅剣と銅矛の長短とセットの問題である。ユーラシア東部における銅剣は、アンドロノヴォ文化系、中国北方系のいずれもが、殷代後期頃から、基本的に短剣であった。こうした短剣は、一つにはナイフのような役割をなし、あるいは武器としてみれば、逆手に持って接近戦で組み手などの状態になったときに致命傷を与える剣として機能したであろう。副葬状態などからみて、逆手によって持つのが通常のありかたであるのは明らかである。こうしたなか、内蒙古・長城地帯では、D類の銚柄式銅矛系列の影響を受けて、C類の銚柄式銅剣系列が出現すると、銚柄式銅矛系列の長く大形な点をも踏襲し、長剣となった。内蒙古・長城地帯では、これによって、西周前半期以降、それまでの短剣と合わせて長短の剣をセットとするようになった。

一方、中原では、春秋戦国時代になるといわゆる中国式銅剣の登場により、順手で持ち、突く長

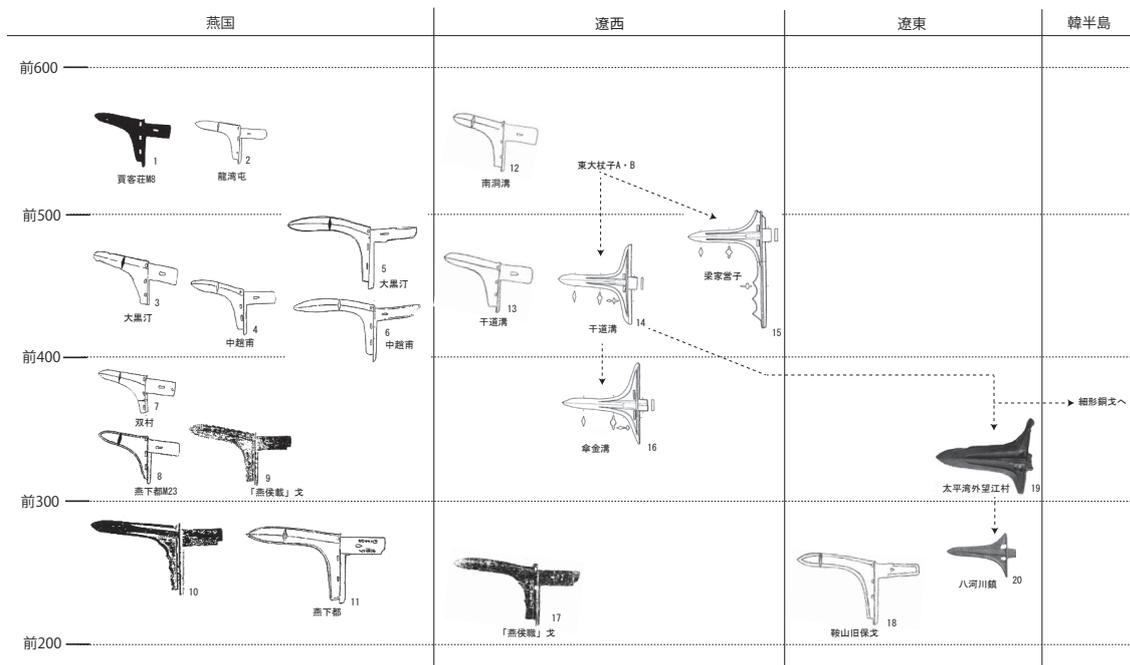


図 7 銅戈の起源と系譜

劍へと移行する。遼寧式銅劍は、元々、逆手の使用が原則であり、これが長くなる背景にはこうした中原系の銅劍の長劍化と、すでに長短を合わせ持つヌルホ山以北の中国北方系の長劍の影響も考えられる。それでも韓半島の遼寧式銅劍は総じて短劍を維持しており、地域によって銅劍の長短に差異がある。こうした地域性は、おそらく戦いにおいて、車馬を比較的利用する地域と、歩兵が主体である地域の戦闘方法の差異が大きく作用していると考えられる。これを傍証するように、いまだ数量的な把握はしていないが、燕山と長城地帯、遼西北部、遼西南部、遼東と東方に行くに従って車馬具の副葬量が減少し、韓半島では皆無となる。銅矛についても、遼西など中国北方地域の柳葉形銅矛系列は大型品が多く、時代の変化と東方への伝播の過程で次第に小形化する現象が見られ、銅劍と銅矛は同じ車馬の文化圏では長く大きく、非車馬の文化圏では短く小さくなり歩兵の槍として機能したのであろう。また、逆手に短劍を持って使用するあり方は、韓半島から弥生文化に伝播し、弥生時代後期までその影響は及んでいた。

こうした、車馬の文化圏と非車馬の文化圏の差異は、車馬具自体の取り扱いにも影響しており、春成秀爾が明らかにしたように、内蒙古の馬の頭に装着する馬面（当盧）が、遼西では人体に装着されて変容し、韓半島では原形がわからないほどに変形して異形銅器化する [春成秀爾 2010]。以上のように、劍の長短とそのセット関係の変化は、弥生文化の武装様式の起源を示しており、車馬具の欠落現象が顕著となる遼東から韓半島が起源であることが明らかとなった。

(2) 青銅武器の象徴的な「細形化」

また、長短に続いて、「細形化」も重要である。弥生青銅器の細形銅劍は、短劍であり、その祖型である遼寧式銅劍も同様に短劍が主体である。しかし、細形銅劍の祖型である遼寧式銅劍文化圏

では、銅剣がすべて短剣であったとはいえない。遼寧式銅剣が出現時期からしばらくの間は、遼東と遼西ともに短剣であるが、西周後期から春秋前期にかけて、大小凌河流域では十二台営子例（図5-46）のようにやや大形化の傾向が見られ、遼東では鄭家窪子例（53）などで長剣化の傾向が顕著である。こうした大小凌河流域の長剣化傾向は、車馬具の存在からみて、一部の首長層はヌルルホ山以北の遼西北における長短セットの影響を受けていたことを示し、首長層以外の階層は、短剣を保有するのが当地域であった。

また、春秋後半から戦国時代にかけて遼西の大小凌河流域と遼東では、さらに長剣化が顕著である。これは、大小凌河流域でみる限り、長剣化した中国式銅剣の影響が強いようであり、これを示すように建昌県干道溝孤山子遺跡では中国式銅剣（64）と遼寧式銅剣（48）が相伴している〔小林ほか2007〕。中国式銅剣（64）は、細身で身が直線の「細形化」が顕著な剣であり、この頃に遼寧式銅剣の刺状突起が明瞭さに欠けはじめ細身化するのには、中国式銅剣の影響による可能性も考える必要がある。この遼寧式銅剣の「細形化」が進行するのは、遼西地域が前6世紀以降、燕国の領域拡大の過程で「燕化」〔宮本2006〕が進行し、在地の青銅器文化が残存しつつも、部分要素において変容せしめる状況となったことを示している。

筆者は、以前の論考において定型的な細形銅矛の形成に関し、遼東と朝鮮半島では在来で変容した「琵琶形系」と遼東の「細形系」の二つが作用していたと考えた〔小林2011〕。そして、プレ朝鮮細形銅矛系列の銅矛の形態に変異が大きいのも、こうした「琵琶形系」と遼東の「細形系」の影響関係の強弱が定型的な形状を作出するのではなく、個々に表出させるような、定型的銅矛出現前段階の社会的変動の反映によるものの可能性を考えた。

こうした各系列の分類とは異なる概念による「琵琶形」「細形」というまとまりの考え方は、雰囲気的なまとまりであり、数値であらわせるようなものではない。こうした見方は、非言説的で必ずしも特定の命題を表徴しない要素であり、筆者はこれを「象徴伝統」〔小林2010〕として説明する。これは、意図的で言説的な型式や様式に相当する概念である「系列」は「伝統」とはほぼ等しく、さらに異なる系列間を自由に横断し、ローカリティやエスニシティに関わるアイデンティティの形成や再生産に重要な機能を果たした「雰囲気」や「気風」を表徴するようなレベルでの非意図的かつ非言説的に形成される可能性の高い相違を「象徴伝統」と呼ぶことにする。「琵琶形系」と「細形系」の両者は、まさにこの「象徴伝統」であり、前者はおそらく遼寧式銅剣を保有する集団のなかの地域集団のローカリティやエスニシティに関わるアイデンティティの形成や再生産に重要な役割を持っていた可能性がある。そして、一方、後者の「細形系」の「細形」とは、実はそのもの自体の形態の特徴を的確に表現した呼称ではなく、他と比較して「細形」であるという意味において機能している。

このような銅剣の「細形化」の背景として考えられるのは、ここまで述べて来たような燕化の影響によるものであろう。この時期に関し、この「燕化」に関連した動向として、遼東においては銅矛の「細形化」傾向の進行によって細形銅矛が誕生し〔小林2011〕、また、遼西にあっては、これまでになかった細形銅戈の起源となる「遼西式銅戈」をも生み出した（図7）〔小林ほか2007、小林2008a〕。遼西式銅戈は、中国式銅戈を客体的にわずかしか持たなかった遼西地域の遼寧式銅剣文化圏の集団が、中国式銅戈と遼寧式銅剣の特徴を接合して創出した異形銅戈である〔小林2009〕。現

在は、遼西地域の資料(図7-13～16)だけでなく、遼東においても型式学的に新しい遼西式銅戈の発見が相次いでいる(図7-19・20)。したがって、筆者は名称を「遼寧式銅戈」へと変更すべきことを最近主張している[小林ほか2011]。現在の資料による限り、この遼寧式銅戈が韓半島と日本列島の細形銅戈の起源であるのは間違いない。

以上のような諸点から見る限り、前6世紀以降の遼寧式銅剣文化圏の遼寧青銅器文化では、それまでの伝統的要素と燕系要素が接合し、あるいは在地の伝統要素が変容したことがわかり、この事実によって、弥生青銅器文化における銅剣・銅矛は、中央ユーラシアに起源し、その系譜があるが、燕国を介して中原系の影響も受けていたことが明らかとなった。このような複雑な系譜関係があるという事実を認識することによって、今度は、青銅器の祭祀の系譜問題についても新しい見解を提示することが可能となる。

(3) 祭祀の起源

中央ユーラシアから北方ユーラシアの初期青銅器文化で注目するのは、セイマ=トルビノ青銅器文化の祭祀である。セイマ=トルビノ青銅器文化系の武器類は、遺体のない墓から出土し、しかも床面や壁に突き刺すなど特異であり、一括埋納、すなわちデポの例が多いことである。セイマ=トルビノ青銅器文化系の有蓋矛については、非実用、すなわち祭器の可能性も指摘されており[高濱2006, 松本2011]、広大な分布を形成しつつも、集落からは出土せず、特殊な場で特殊な出土状態を示すのは、極めて祭祀行為に用いられた祭器としての性格を示している。起源地と目されるアルタイからバイカル周辺は、金属製武器の出現が遅れた地域であり、当地域の集団が祭器として保持し、共通した祭祀行為を行い、その象徴として機能していた可能性を考えたい。この場合、武器が主に祭器となっており、墓室風の内部で床面と壁に刺すという行為は、墓室風の内部とその場が聖なる空間であり、そこに迷い込む悪霊などを除去ないし封印し、侵入を防ぐ辟邪として機能していると考えられる。

こうした武器類の祭祀について興味深いのは、大林太良による戦神の崇拝がある[大林1975]。大林によれば、戦神としての剣の崇拝は、かつてユーラシアの草原地帯の遊牧民の世界に広く分布していたとし、ヘロドトスの『歴史』に記載されたスキタイの例を挙げている。スキタイ人は、地区ごとに、毎年百五十両の車に積んだ薪を積み上げて、巨大な方形の祭壇を築き、その頂上に一振りの鉄の古刀が、スキタイの崇拝する神である「アレス神」として祭られていたという。この祭りでは、捕虜を犠牲として捧げている。同様な崇拝は、『前漢書』に記載された匈奴の径路刀を祭る径路祠祭祀があり、スキタイの例と非常に類似する。大林は、こうした遊牧民の崇拝が日本神話に影響を与えている可能性を指摘している。具体的に、セイマ=トルビノ青銅器文化とスキタイ文化の間には、1000年近い開きがあり両者の関係性を持ち出すには無理があるが、すでに大林が指摘するような戦神の崇拝が、金属製武器の出現期であるセイマ=トルビノ青銅器文化に始まった可能性も考えられなくはない。セイマ=トルビノ青銅器文化とスキタイ文化の起源がほぼ同地域であるのは、果たして偶然であろうか。

その後、同地域のカラスク文化段階に、長城地帯から遼寧省一帯で武器の埋納例が見られるが[宮本2000, 甲元2008]、これも、セイマ=トルビノ青銅器文化で見られる武器類の埋納行為の系譜に

繋がる可能性がある。北方ユーラシアの青銅器武器の埋納習俗は、中国北方地域にも影響を与えていると考えることができるであろう。このようになると、青銅器類の埋納行為については、かつて佐原真はヨーロッパのデポと日本列島の埋納の比較を行なったが〔佐原1985〕、本来、起源は同一であった可能性さえある。遼寧地域にまで、以上のように埋納習俗の系譜を辿ることができれば、韓半島における埋納習俗もこの系譜に連なり、弥生文化の青銅器埋納も同じものと考えられるであろう。

このように、青銅武器が埋納されるのは、先に、セイマ＝トルビノ青銅器文化の埋納で推測したように、辟邪としての機能をもつからであろう。おそらく、埋納の場自体が、祭祀的な特別な場であり、その場を設定することで埋納行為を遂行した集団にとって、何らかの脅威を取扱う機能をもっていたと考える。先に触れた、大林太良による戦神の崇拜〔大林1975〕についても、剣を神に譬え、犠牲を捧げる行為は、遊牧民社会の統合のための象徴的な祭祀であるとともに、敵の脅威を振り払う、不安定な状態を安定した状態へと促す象徴行為であろう。こうした象徴的行為こそ、辟邪に他ならない。

このような象徴行為を実践するにあたって、銅剣や銅矛のような青銅武器が辟邪の装置となったのは、武器が敵を倒す、という性格を持つ事に起因するのは明らかであろう。これと関連して、北方ユーラシアや中国北方地域では、蛇の意匠を剣に付加するなど両者の関係性は強く、黒海周辺地域では、鬮斧などに具象的な蛇を表現するものなどが、すでに紀元前2千年紀からある〔小林2009〕。銅剣には、蛇の他に、トラなどの猛獣が表現されており、これは、おそらく剣が敵を倒す武器であるという特徴をもち、毒で人を倒す、あるいは強者の象徴という意味の上で相同関係となり、そこから「辟邪」としての武器／蛇・トラ（猛獣）という意味の連鎖が生じたものと考えられる〔小林2009〕。こうした意味の連鎖は、たとえば銅剣の鞘自体をマムシに見立てた内蒙古の熱水湯遺跡例〔小林2011〕を筆頭に、剣の鞘や剣の柄などに蛇の三角形の鱗の形状を辟邪のシンボルとみなし、その他にもシャーマンなどが身につける多鈕鏡など、辟邪の祭祀に使用される器物にその文様は施された。この鞘に施した透かしなどの三角文は、北方ユーラシアの鹿石に描かれた岩絵に表現され、そして、黒海周辺地域の紀元前2千年紀の青銅器文化にも同種のものがある〔小林2009〕。そして、その意匠は最終的には韓半島で鋸歯文へと変化する。この鋸歯文は、やがて弥生文化で盾や銅鐸など、様々な祭祀具に施されることになった。

以上のように、辟邪としての埋納習俗が、北方ユーラシアに起源することが想定できるが、先に系譜関係の複雑さを述べたように、韓半島を経て日本列島の弥生文化に伝播した青銅器に付随する祭祀的意味の系譜は、遡源して考えれば、大きくは北方ユーラシア系と中原の燕系ということになる。すなわち、弥生文化には、北方草原の遊牧民の祭祀的世界と古代中国で形成された礼制的祭祀世界の両者の系譜を、何らかの形で受け継いでいるということになる。確かに、弥生文化で重要視された銅戈の祭祀は、中国中原の祭祀儀礼の系譜に連なる可能性は高く、青銅武器に限ってみれば、銅剣・銅矛と銅戈ではその祭祀・儀礼的意味に差異があったことが推測される〔小林2009〕。

これまでの弥生文化の祭祀の起源と系譜については、水稻農耕に関わる部分での関係性のなかで考えていたため、たとえば中国南方の系譜を想定するなどの考えがあったが、実際には中国北方諸地域の影響の方が大きかったのである。

おわりに

以上のように、弥生文化の青銅器のうち、銅剣・銅矛の起源と系譜を辿ったところ、いずれも中央ユーラシアから北方ユーラシアに起源があることがより鮮明となった。そして、青銅武器は実用的な武器としてだけでなく、集団の不安定な状態を安定へと導く辟邪の象徴としても機能し、それが、埋納行為などとして実践されて弥生文化に受け継がれていった。

銅剣・銅矛・銅戈といった青銅器がセットで日本列島に渡来するのは、前期末から中期初頭頃である。この時期以降に日本列島に出現する祭祀具は多く、たとえば、卜骨、鳥形木製品、木製男女像などがあり、鹿などの絵画もこの頃以降に現れる要素である。このうち、卜骨は殷代末期併行期から中国北方地域にあり、遼寧青銅器文化においても見られる。また、木製男女像は、新疆の青銅器文化において紀元前2千年紀から見られ、春秋戦国時代併行期にまでも系譜が続いている [韓2007]。そして、この新疆でも見られるが、モンゴル平原を中心に、中央ユーラシアから北方ユーラシアで見られる鹿石に代表される鹿への崇拜があり、中国北方地域でも春秋戦国時代頃から、多数の青銅製品などに鹿は形象された [小林2012]。これら弥生文化の祭祀にかかわるもののほとんどが、ほぼ同時期に日本列島に渡来し、また、銅剣や銅矛と同様に中央ユーラシア地域から北方ユーラシア地域、そして中国北方地域に系譜が辿れるとすれば、いずれもが北方系の祭祀要素であることが推測される。

本稿では、弥生青銅器のなかでも銅剣と銅矛に焦点をあてて検討してきたが、以上のように、他の弥生祭祀の要素の多くも北方系起源である可能性が非常に高いのである。ただし、銅戈の問題で指摘したように、中原系の影響を受けている要素があることも付け加えておかなければならない。

註

(1)——なお、旧ソ連地域の諸文化の範囲は、チェルヌイフ、コルヤコワなどの研究より作成し、後者の範囲はチェルヌイフの研究を参考とした [chernykh1992, Koryakova and Epinov2006]。なお、各文化圏のロシア語からカナカナ表記への読みかえについては、福田正宏氏の教示を受けた。

(2)——ユーラシア冶金圏に関する点について、コルヤコワなどは、同じ意味で「ユーラシア冶金技術ネットワーク」という表現を使用している [Koryakova and Epinov2006]。

(3)——京畿広州市駅洞遺跡については、ハンオル文化財研究院の金一圭氏(当時)の協力により、資料の観察と実測をさせていただいた。本資料は、正式には未公表であり、今回は、金氏に提供していただいた現地説明会用の遺跡パンフレットの写真を引用した。

(4)——甲元眞之によれば、紀元前1千年紀初め頃に寒

冷化が起こっており、その寒冷化は紀元前750年頃をピークとする前後100年間の事象であるという [甲元2007ほか]。この寒冷乾燥化による森林の消失、草原や砂漠の拡大は、オアシス国家形成へのターニング・ポイントであったことが多くの研究者により説かれてきたと甲元は説明している。

(5)——註3参照。

(6)——最近、鄭家窪子M6512出土の1b式の遼寧式銅剣例(53)と同時期の銅剣の鑄型が遼陽の塔湾村で発見され [小林ほか2011]、樋の輪郭凹線を彫り込んでいることが明らかとなった。宮本一夫は、本例は韓半島の宮本分類の遼寧式銅剣AⅡ・AⅢ式で樋が存在することと関連していると考え、1b式の年代を前6世紀に納まることとした [小林ほか2011]。宮本が想定するように細形銅剣の祖型が韓半島の宮本分類の遼寧式銅剣AⅡc式(60)であるとすると [宮本2008]、細形銅剣直前型式の伝成

川例(60)は2a式と同じ時期の前5世紀前半まで下がる可能性を宮本は指摘した[小林ほか2011]。当地域では、その後、細形化が進行し、下半分が下膨れ状をなし(劉家哨など)、関まで研ぎ抜くものとそうでないもの小系列が出現し後者から尹家村タイプと五道嶺溝門タイプなどが成立する。

(7)——ここでの銅矛の分類記号は、遼寧地域よりも西方の地域の銅矛を加えたので、旧稿[小林2011]とは変えて表示した。

(8)——本研究の内容は、国立歴史民俗博物館が平成16年度から20年度に実施した文部科学省科学研究費補助金、学術創成研究「弥生農耕の起源と東アジア—炭素年代測定による高精度編年体系の構築—」[研究代表者 西本豊弘(人間文化研究機構 国立歴史民俗博物館・教授)]に負うところが大きく、このプロジェクトのな

かで創成された研究である。また、このプロジェクトを受けて、同館が立ち上げた平成21年度共同研究、基幹研究「新しい古代像樹立のための総合的研究」(総括研究代表者 本館・研究部 藤尾 慎一郎)のB班「農耕文化の成立と展開—弥生時代像の再構築—」(前10～後3世紀)の共同研究員として努めた研究の成果でもあることを記しておく。本稿の概要は、この共同研究での報告と議論を補ったものである。そして、筆者が研究代表者を務める平成21年度から23年度の科学研究費補助金基盤研究B「紀元前中原青銅器の再検討による中国北方青銅器文化研究の再構築」で実施した遼寧省と内蒙古自治区での調査成果の一部を加えている。各研究プロジェクトでは、国内外の多くの諸先生と諸氏、そして諸機関にご協力ならびにご教示、ご支援をいただいた。感謝申し上げます。

引用・参考文献

日文

- 石川岳彦 2009a「紀元前10世紀前後の遼東・遼西」『弥生時代の考古学 2 弥生文化誕生』, 59-72頁, 同成社
- 石川岳彦 2009b「日本への金属器の渡来」西本豊弘編『新弥生時代のはじまり 第4巻 東弥生農耕のはじまりとその年代』147-160頁, 雄山閣
- 梅原末治 1933「朝鮮出土銅剣銅鉞の新資料」『人類学雑誌』第48巻第4号, 222-228頁, 東京人類学会
- 江上波夫 1936「遼寧地方出土古鏡の二三に就きて—付多鈕鏡の起源に関する考察—」『考古学雑誌』第26巻第7号, 11-20頁, 日本考古学会
- 大貫静夫編 2007『遼寧を中心とする東北アジア古代史の再構成』東京大学大学院
- 大林太良 1975『神話と神話学』大和書房
- 岡内三真 2006「朝鮮半島青銅器からの視点」『季刊考古学』第88号, 67-74頁, 雄山閣
- 岡崎 敬 2009『古代中国の考古学』第一書房
- 郭 大順 2006「遼東青銅器文化の独自性」『古代東アジアの青銅器文化と社会—起源・年代・系譜・流通・儀礼—』76-82頁, 国立歴史民俗博物館国際シンポジウム発表要旨集
- 金 用珩・黄 基徳(永島暉臣慎・西谷 正訳) 1968「紀元前1000年紀前半期の古朝鮮文化」『古代学』14, 245-263頁,
- 甲元眞之 2008『東北アジアの青銅器文化と社会』同成社
- 甲元眞之 2008「気候変動と考古学」『文学部論叢』97(歴史学篇), 1-52頁, 熊本大学
- 小林青樹・春成秀爾・宮本一夫・石川岳彦 2007「遼西式銅戈と朝鮮式銅戈の起源」『中国考古学』第7号, 57-76頁, 日本中国考古学会
- 小林青樹・李 新全・宮本一夫・石川岳彦 2012「近年の遼寧地域における青銅器・鉄器研究の現状」『中国考古学』第12号, 203-222頁, 日本中国考古学会
- 小林青樹 2008「遼寧式銅剣の起源に関する諸問題」『中国考古学』第8号, 167-185頁, 日本中国考古学会
- 小林青樹 2009「蛇形信仰の起源」『東アジアの古代文化』137号, 226-230頁, 大和書房
- 小林青樹 2010「銅矛の起源」『日本基層文化論叢』椋山林継先生古稀記念論集, 38-47頁, 雄山閣
- 小林青樹 2011「細形銅矛の起源」『栃木史学』第25号, 13-37頁, 栃木史学会
- 小林青樹 2012「中国北方地域における動物意匠と弥生文化」『栃木史学』第26号, 23-48頁, 栃木史学会
- 近藤喬一 1969「朝鮮日本における初期金属器文化の系譜と展開—銅矛を中心として—」『史林』第52巻第1号, 75-115頁, 史学研究会
- 近藤喬一 2000「東アジアの銅剣文化と向津具の銅剣」『山口県史—資料編 考古1—』709-794頁, 山口県史編纂室
- 佐野和美 2004「中国における初現期の銅器・青銅器」『中国考古学』第4号, 49-78頁, 日本中国考古学会
- 佐原 真 1985「ヨーロッパ先史考古学における埋納(デポ)の概念」『国立歴史民俗博物館研究報告』第7集,

- 523-573 頁, 国立歴史民俗博物館
- 徐 光輝 1996 「遼寧式銅劍の起源について」『史観』第 135 冊, 64-81 頁, 早稲田大学史学会
- 高橋健自 1916 「銅銚銅劍考 (4)」『考古学雑誌』第 7 卷第 3 号, 20-31 頁, 考古学会
- 高濱 秀 1983 「オロドス青銅短劍の型式分類」『東京国立博物館紀要』第 18 号, 93-131 頁, 東京国立博物館
- 高濱 秀 1995 「西周・東周時代における中国北辺の文化」『江上波夫先生米寿祈年論集 文明学原論』339-357 頁, 古代オリエント博物館編, 山川出版社
- 高濱 秀 2000 「前 2 千年紀前半の中央ユーラシアの銅器若干について」『シルクロード学研究叢書』3, 111-127 頁, 奈良シルクロード学研究センター
- 高濱 秀 2005 『東京国立博物館所蔵 中国北方系青銅器』竹林舎
- 高濱 秀 2006 「北方ユーラシアの青銅器文化」春成秀爾編 2006 『古代東アジアの青銅器文化と社会一起源・年代・系譜・流通・儀礼一』35-40 頁, 国立歴史民俗博物館国際シンポジウム発表要旨集
- 田中裕子 2011 「新疆出土鏃の分類と編年」『中国考古学』第 11 号, 155-170 頁, 日本中国考古学会
- 千葉基次 1997 「古式の遼寧式銅劍—遼東青銅器文化考 2—」『生産の考古学』337-344 頁, 同成社
- 中村大介 2007 「遼寧式銅劍の系統的展開と起源」『中国考古学』第 7 号, 1-30 頁, 日本中国考古学会
- 林 巳奈夫 1972 『殷周青銅武器の研究』朋友書店
- 春成秀爾・宮本一夫・小林青樹・石川岳彦 2007 「遼寧式銅劍の起源と年代」『日本中国考古学会 2007 年度大会発表要旨』93-99 頁, 日本中国考古学会
- 春成秀爾 2006 「弥生時代の新年代」『弥生時代の新年代』新弥生時代のはじまり, 第 1 巻, 65-89 頁, 雄山閣
- 春成秀爾 2007 「防牌形銅飾りの系譜と年代」『新弥生時代のはじまり』縄文時代から弥生時代へ, 第 2 巻, 128-146 頁, 雄山閣
- 春成秀爾 2010 「当盧の系譜」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 158 集, 27-78 頁, 国立歴史民俗博物館
- 藤田亮策・梅原末治・小泉顕夫 1925 『大正 11 年度古蹟調査報告第 2 冊—南朝鮮に於ける漢代の遺跡—』, 京城: 朝鮮総督府
- 町田 章 2006 「7 東湖の曲刃短劍」『研究論集』XV, 奈良文化財研究所学報, 第 7 冊, 111-162 頁, 奈良文化財研究所
- 松本圭太 2011 「中国初期青銅器とセイマ・トルビノ青銅器群—有蓋矛の分析を中心に」『中国考古学』第 11 号, 133-155 頁, 日本中国考古学会
- 松本圭太 2011 「カラスク式短劍の形成と発展」『鄂爾多斯青銅器国際学術研討会論文集』鄂爾多斯青銅器国際学術研討会論文集編集組編, 363-382 頁, 科学出版社
- 水野精一・江上波夫 1932 『内蒙古・長城地帯』東方考古学叢刊, 乙種第 1 冊, 74-149 頁, 東亜考古学会
- 宮里 修 2001 「朝鮮半島の銅劍について」『古代』第 109 号, 125-159 頁, 早稲田大学考古学会
- 宮里 修 2007 「朝鮮式細形銅劍の成立過程再考—東北アジア琵琶形銅劍の展開のなかで—」『中国シルクロードの変遷』(アジア地域文化学叢書Ⅶ), 168-189 頁, 雄山閣
- 宮里 修 2009 「朝鮮半島の銅矛について」『古代』第 122 号, 155-179 頁, 早稲田大学考古学会
- 宮本一夫 1998 「古式遼寧式銅劍の地域性と社会」『史淵』135, 125-160 頁, 九州大学大学院人文科学研究院
- 宮本一夫 2000 『中国古代北疆史の考古学的研究』中国書店
- 宮本一夫 2002 「吉長地区における青銅武器の変遷と地域的特徴」『東北アジアにおける先史文化の比較考古学的研究』, 53-65 頁, 九州大学大学院人文科学研究院
- 宮本一夫 2003 「東北アジア青銅器文化からみた韓国青銅器文化に関する研究」『青丘学術論集』第 22 集, 95-123 頁, 韓国文化研究振興財団
- 宮本一夫 2005 『神話から歴史へ 中国の歴史 01』講談社
- 宮本一夫 2006 「長城地帯の青銅器」春成秀爾編 2006 『古代東アジアの青銅器文化と社会一起源・年代・系譜・流通・儀礼一』41-47 頁, 国立歴史民俗博物館国際シンポジウム発表要旨集
- 宮本一夫編 2008a 『長城地帯青銅器文化の研究』シルクロード学研究 Vol.29, 1-187 頁, シルクロード学研究センター
- 宮本一夫 2008b 「細形銅劍と細形銅矛の成立年代」春成秀爾・西本豊弘編 『新弥生時代のはじまり 第 3 巻 東アジア青銅器の系譜』, 9-23 頁, 雄山閣
- 宮本一夫 2008c 「遼東の遼寧式銅劍から弥生の年代を考える」『史淵』第 145 輯, 155-190 頁, 九州大学大学院人文科学研究院
- 宮本一夫・白 雲翔編 2009 『中国初期青銅器文化の研究』九州大学出版会

-
- 村上恭通 1997「遼寧（東北系）銅劍の生成と変容」『先史学・考古学論究』2, 457-479頁, 竜田考古学会
吉田 広 2008「日本列島における武器形青銅器の鑄造開始年代」春成秀爾・西本豊弘編『新弥生時代のはじまり第3巻 東アジア青銅器の系譜』, 39-54頁, 雄山閣
李 剛 2002「中国東北地方の筒形柄銅利器について」『中国考古学』第2号, 64-86頁, 日本中国考古学会

中文

- 王 成生 2003「遼寧出土銅戈及相關問題的研究」『遼寧考古文集』217-241頁, 遼寧民族出版社
靳 楓毅 1982「論中国東北地区含曲刃青銅短劍的文化遺存 上」『考古學報』1982年-4期, 387-426頁, 中国科学院
靳 楓毅 1983「論中国東北地区含曲刃青銅短劍的文化遺存 下」『考古學報』1983年-1期, 133-145頁, 中国科学院
靳 楓毅 2011「論玉皇廟文化」『鄂爾多斯青銅器國際學術研討會論文集』635-671頁, 鄂爾多斯青銅器國際學術研討會論文集編集組編, 科学出版社
河南省文物考古研究所・三門峽市文物工作隊 1999『三門峽虢國墓』文物出版社
韓 建並 2007『新疆的青銅時代和早期鐵器時代文化』文物出版社
許 玉林・王 連春 1983「遼寧新金双房石蓋石棺墓」『考古』1983年第3期, 293-295頁, 科学出版社
項 春松・李 義 1995「寧城小黑石溝石槨墓調查清理報告」『文物』1995年5期, 4-22頁, 文物出版社
宋 健忠編 2006『靈石旌介村商墓』科学出版社
朱 永剛 1992「試論我国北方地区鋸柄式柱脊短劍」『文物』12期, 65-72頁, 文物出版社
朱 貴 1960「遼寧朝陽十二台營子青銅短劍墓」『考古學報』1960年第1期, 63-72頁, 中国科学院
昭烏達盟文物工作站・中国科学院考古研究所東北工作隊 1973「寧城縣南山根的石槨墓」『考古學報』2期, 27-39頁, 中国科学院
邵 国田 1993「内蒙古敖漢旗發現的青銅器及有關遺物」『北方文物』1期, 18-25頁, 北方文物雜誌社
中国社会科学院考古研究所東北工作隊 1981「内蒙古寧城縣南山根102号石槨墓」『考古』1981年第4期, 304-308頁, 科学出版社
鄭 紹宗 1984「中国北方青銅短劍的分期及形制研究」『文物』1984年第2期, 37-49頁, 文物出版社
田 広金・郭 素新 2004「中国北方青銅器文化和類型的初步研究」『北方考古論文集』, 160-199頁, 科学出版社
内蒙古自治区文物考古研究所・鄂爾多斯博物館 2000『朱開溝』文物出版社
内蒙古自治区文物考古研究所・寧城縣遼中京博物館編 2009『小黑石溝—夏家店上層文化遺址發掘報告一』文物出版社
北京市文物管理处 1976「北京地区的又重要考古收穫」『考古』1976年4期, 246-258・228頁, 科学出版社
北京市文物研究所 1995『琉璃河西周燕國墓地』文物出版社
楊 紹舜 1981「山西柳林縣高紅發見商代銅器」『考古』1981年13期, 211-212頁, 科学出版社
翟 德芳 1988「中国東北地区青銅短劍分群研究」『考古學報』1988年3期, 277-299頁, 中国科学院
劉 国祥 2000「夏家店上層文化青銅器研究」『考古學報』2000年第4期, 451-500頁, 中国科学院
李 逸友 1959「内蒙古小昭烏達盟出土的銅器調查」『考古』1959年6期, 276-317頁, 科学出版社
李 殿福 1991「建平孤山子, 榆樹林子青銅時代墓葬」『遼海文物學刊』2期, 1-9頁, 遼海文物學刊編集部
林 澐 1980「中国東北系銅劍論」『考古學報』1980年第2期, 139-162頁, 中国科学院
林 澐 1997「中国東北系銅劍再論」『考古學文化論集』(4), 335-351頁, 文物出版社

ハングル

- 金 元龍 1961「十二台營子の青銅短劍墓—韓国青銅器文化の起源問題—」『歴史學報』第16輯, 109-121頁, 歴史学会
国立中央博物館 2006『北の文化遺産』
尹 武炳 1972「韓国青銅遺物の研究」『白山學報』第12号, 59-134頁, 白山学会
全 榮來 1977「韓国青銅器文化の系譜と編年—多鈕鏡の変遷を中心に—」『全北遺跡調査報告』第7輯, 4-85頁, 国立全州博物館
宮里 修 2011『韓半島青銅器の起源と発展』社会評論
李 健茂 1992a「韓国青銅儀器の研究—異形銅器を中心に—」『韓国考古學報』第28輯, 131-216頁, 韓国考古学会

-
- 李 健茂 1992b 「韓国の青銅器文化」『韓国の青銅器文化』, 126-142 頁, 国立中央博物館, 汎友社
李 清圭 1982 「細形銅剣の型式分類と変遷について」『韓国考古学報』第 13 輯, 1-36 頁, 韓国考古学会

欧文

- Chernykh,E.N ,1992. Ancient Metallurgy in the USSR. *The Early Metal Age*, Cambridge: Cambridge University Press.
Kuzumina,E.E ,2004 Historical representatives on the Andoronovo and metal use in eastern Asia, In *Metallurgy in Eastern Eurasia from the Urals to Yellow River*, pp.38-84,ed. K.M.LinduffLewiston, Queenston, Lampeter: The Edwin Mellen Press
Koryakova,L.N and Eoimakhov,A.G ,2007 The Urals And Western Siberia In *The Bronze and Iron Ages, Cambridge World Archaeology*, pp.1-184, Cambridge University Press
Loehr.M ,1951 Ordos, Daggers and knives, new material, classification and chronology, *Artibus Asiae*, Vol.14, nos.1/2, pp.77-162.

図表の出典：各文献より引用改変

表 1：筆者作成

図 1～4：筆者作成

図 5：1～4：[Koryakova and Eoimakhov 2007], 5～8 [Chernykh 1992], 9・10・11・19～23・24・26～36・37～43・45 [町田 2006], 12～15 [林 1972], 16 [宮本 2000], 17・18 [田・郭 2004], 44 [小林 2008], 46～48・52～55 [靳 1982・1983], 49 [甲元 2008], 50・51 [郭 2006], 56 [註 3], 57～63 [宮里 2011]

図 6：1～3：(Koryakova and Eoimakhov 2007), 4・5 (岡崎 1953), 6～8 (甲元 2008), 9 (楊 1981), 10～14 (甲元 2008), 15～18 (宮本 2000), 19～49 (小林 2011)

図 7：1～13・17・18 (王 2003), 14～16 (小林ほか 2007), 19 (小林ほか 2012), 20 (小林ほか 2011)

(國學院大學栃木短期大学日本文化学科, 国立歴史民俗博物館共同研究員)

(2012 年 12 月 7 日受付, 2013 年 5 月 24 日審査終了)

Bronze Cultures in Eastern Eurasia : the Origin of Yayoi Bronze Implements

KOBAYASHI Seiji

This article covers the origin and provenance of the Yayoi bronze culture from the viewpoint of multiple cultural spheres in eastern Eurasia after the second millennium B.C. In particular, the present article argues the origin and provenance of the slender bronze swords and spearheads of the Yayoi bronze culture in the course of the formation of Eurasian cultural spheres. First, the study provides a brief review of the development of bronze cultural spheres in Eurasia. With regard to the origin of the slender bronze swords, in the former half of the first millennium B.C., northern Eurasia had a series of Karasuk bronze daggers affected by the bronze daggers belonging to northern China. There also was a series influenced by the jiang bing type bronze spearheads (bronze spearheads with a hole in the shaft to install a handle) belonging to the Andronovo bronze culture. Both series were related to each other, mutually supplementing their partial elements. The present research determines that the origin of a series of Liaoning bronze swords, which slender bronze swords were derived from, was the above-mentioned bronze spearheads of the Andronovo bronze culture. Their influences spread out from Liaoxi through Shanxi to Liaodong, where shaft-less, stemmed bronze daggers were produced due to the lack of a soil molding method necessary for making socketed shafts. Combining these techniques with their traditional bone and stone swords, Liaodong people developed a series of Liaoning bronze swords. On the other hand, the present research indicates that the slender bronze spearheads were also derived from the bronze spearheads of the Andronovo bronze culture, which were introduced to the Yanshan and Liaoxi regions through Shanxi and then became a series of willow leaf-shaped bronze spearheads. Based on the above considerations, this study examines the origin of armament style. Whereas both long and short swords and spearheads were used in areas with horse-drawn carriages, short daggers and spearheads went mainstream in an area from Liaodong to the Korean Peninsula, where horses and carriages were rarely used. The latter became the origin of the armament style of the Yayoi bronze culture. Moreover, the study determines that the Yayoi custom of caching bronze ritual implements was originated from the custom of the northern Eurasia bronze culture in the second millennium B.C. that spread out to the Korean Peninsula through the Chinese northern region.

Key words: Eastern Eurasia, Early bronze culture, Yayoi bronze implements, Bronze swords, Bronze spearheads, Ritual implements
